



濱田 仁：お祓いの起源ホンダワラ類と 出雲の佐太神社

1. はじめに

民俗藻類学の旅、今回も出雲（図1）に来た。今日、出雲は人口減少傾向にある過疎地の様ではあるが、古代においては日本の政治と文化の中心であったと思われる。古事記（712年）上巻の神代や、日本書紀（720年）第1巻～第2巻の神代の主な舞台は出雲である。また、他の国の風土記が完本として残らない中で、出雲國風土記（733年）だけが殆ど完本で残っている。書物を作り、書き写すには、当時大変高価で貴重な紙や墨が必要で、また高度に知的な長い作業を要する事を考えると、完本で残ること自体、政治的・経済的・文化的水準が非常に高かった、と考えるのが自然だろう。

さて、日本の伝統的な宗教文化である神道ではケガレを祓い心身を清浄に保つことは重要で、その為にお祓いや潔斎を行う。今日お祓いには神の枝や木の棒の先に紙や麻を垂らした大麻（図2）を使うが、島根県では神事や忌明けの際、大麻の代わりにホンダワラ属の海藻（潮草又はジンバと言う、

図3）を用いる神社がある。島根県松江市の佐太神社（図4）や同県大田市の五十猛神社の様な千数百年を越える古社で、これらの神社では大麻で祓う代わりに潮草でお祓いをする神事がある。生命力に溢れ、清浄な海を象徴する潮草でお祓いをしたのが、後に内陸でも便利な大麻に代わったのではないだろうか。ここでは佐太神社の神事と周辺の風俗、その歴史的背景に触れ、お祓いの起源を考えてみたい。

なお本稿では、ホンダワラ属の海藻を、原則として、学術的な場合はホンダワラ類、お祓いに関する場合は潮草、食べ物や五穀豊穰に関してはジンバと記した。

2. 佐太神社と宮司家・朝山氏

出雲國二宮・佐太神社は、出雲國風土記（733年）（秋本1958）や延喜式（927年）（黒板1974）にも載る格式高い古社である。松江市中心部から北西へ車で20分。豊かな農村風景が広がる朝日山の麓に、三殿並立といって大社造りの三神殿が横に並ぶ（図4）。約200年前建立の珍しい建築様式で、1982年、国の重要文化財に指定された。やや大きい中央正殿には佐太大神・伊弉諾尊・伊弉冉尊・速玉之男命・事解男命が祀られ、向かって右の北殿には天照大神と瓊々杵尊、左の南殿には須佐之男尊と秘説四座が祀られる。3神殿の前には幅約50mの長い門がある。門の中央手前には石段があり、砂利を敷いた明るい境内が広がる。本殿に向かって左側には国の重要無形文化財・佐太神能が演じられる舞殿、右側には祈祷所とお札売場を兼ねた建物、さらに右奥に社務所があり、境内手前には弥生式土器が出土した広い駐車場がある。

現宮司は朝山家45代朝山芳園（国構えの中の「方」は「土」が正字）氏。朝山家の祖は古代随一の豪族で軍事を司った大伴氏。大伴氏の祖は、瓊々杵尊が高天原から葦原中国に天下りする天孫降臨の際に先導した天忍日命とされ（古事記（712年）（倉野1958））、万葉集の編者の大伴家持など文化人を輩出した名門で、家持とは少し前の代で分かれた。大伴氏は中央での勢力を藤原氏に奪われ、承和3年（836年）出雲介（国司）として出雲に下った。やがて神門郡朝山郷に城を構えて朝山氏を称し、室町期には出雲10郡のうち3郡半を支配し、祭祀も司った。その後、太閤検地により所領の多くを没収され、祭祀だけを行う様になり、明治以後さらに神職の数を減らされ今日に至る。

3. 忌明けのお祓いと潮草

忌明けと潮草

佐太神社には、門の前の石段下に、参拝者がお祓いに用いた潮草を置く潮草架けがある（図5）。潮草は、島根県ではジ

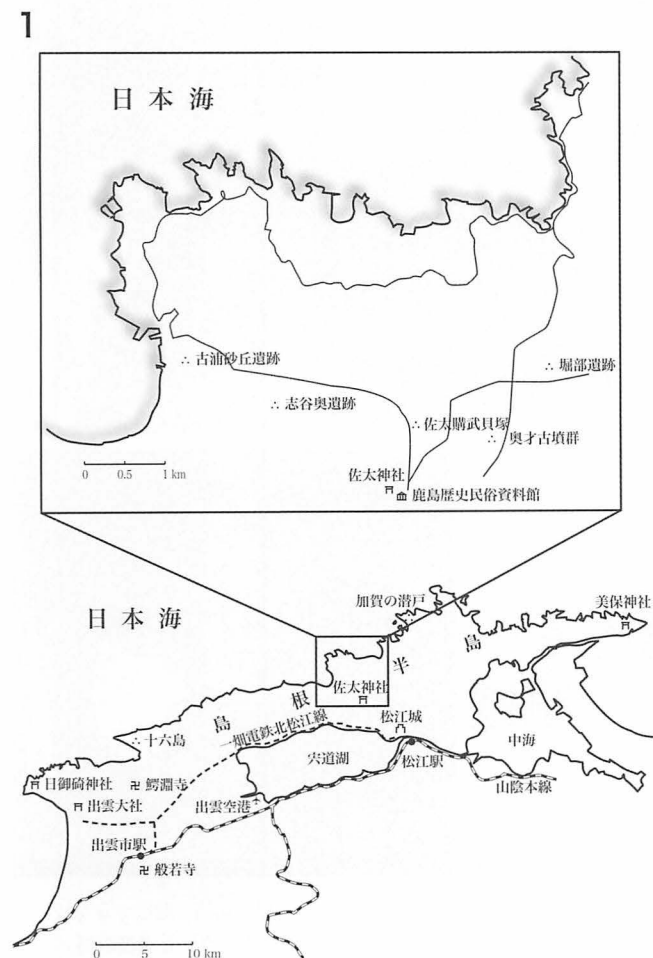


図1 佐太神社と出雲地方の地図。



図2-3 2. お祓いに使う大麻。神主が手に持つ、白い紙の下がついた棒が大麻。 3. 出雲地方でお祓いに使われる潮草（ホンダワラ類）の一種、ヨレモク。

ンバ・ジンバソウ・ジンボ・ジンボサなどと言い、佐太神社でもジンバまたは潮草と言う。何故、潮草を潮草架けに架けるのだろうか？朝山宮司に依ると、佐太神社で日常の神饌（神様の食べ物）に使う海藻は、ノリ・ワカメ・コンブぐらいだが、

お祓いには潮草を使う。身内の不幸の後、仏教で49日、神道で50日の忌が明けるとかなり遠くからも参拝者がある。その際、遺族は海に行って海水で口をすすぎ、手を洗い身を淨める。その後、潮草と竹製の潮筒（潮汲みタガ、潮タガ）に入れた海水を濱から神社に持参し、潮草を軽く海水に浸け、扇子で扇ぐように左・右・左と潮草で自分の身を祓って浄める。その後、潮筒の海水で手を洗う。昔は、潮草を架けたり、潮筒を置く場所がなく、潮草は神社の柱か壁に打った釘にかけるか、賽銭箱の隅、欄干などに置いた。しかし建物も傷むので、佐太神社が重要文化財に指定された1982年頃に潮草架けが出来、潮筒を架けるようになった。佐太神社の他には、例えば松江市内の武内神社・売布神社・神魂神社・八重垣神社等の古社で氏子が潮草でお祓いをしており、石見の大田・浜田・益田でも潮草を使う神社がある。佐太神社ではこの風習が特に盛んで、縄文・弥生・古墳・中世と続く遺跡も多く（後述）、祖先の祀りやお祓いの原型を今に伝えているようだ。ところが、同じ出雲でも出雲大社・日御碕神社などでは潮草のお祓いはず、大麻を用いる。因みに全国では、多くの神社で昆布やスルメを神様に供え、家庭では正月にホンダワラ類を供える風習がまだ残っている。

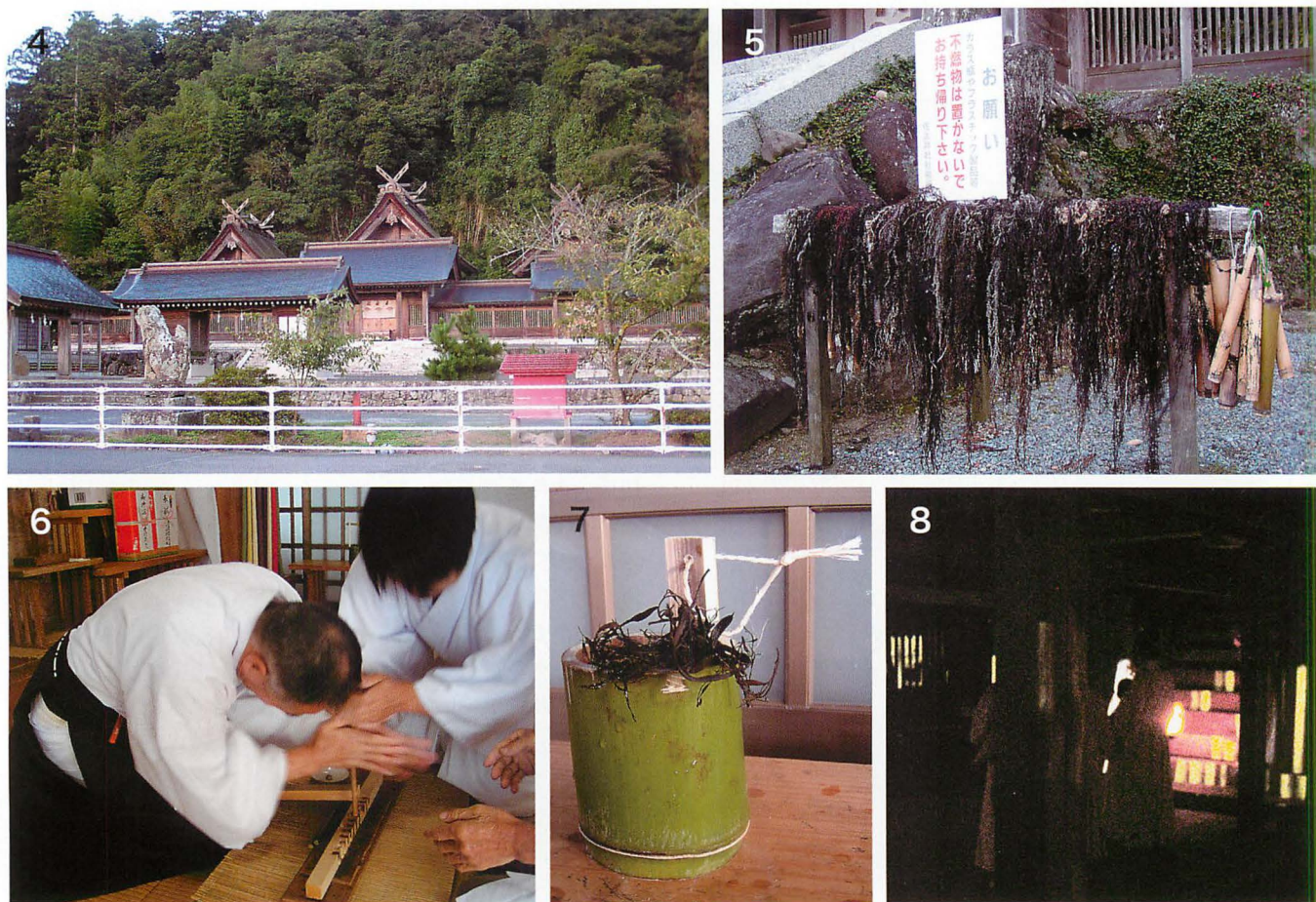


図4-8 佐太神社。 4. 佐太神社全景。本文参照。 5. 佐太神社の門の前の石段下の、潮草架けに掛かる潮草と竹製の潮筒。潮草で身を祓った後、潮筒の中の海水で手を洗い浄める。 6. 佐太神社で行われる燵の様子。 7. 御座替え神事の際の潮草（ヤナギモク）と潮汲み桶。 8. 深夜、本殿で行われる御座替え神事の様子。

潮草の種類

それでは、佐太神社で使われる潮草の種類は何だろうか？潮草架けにかかる潮草を標本にして調べると、アカモク、ジョロモク、トゲモク、ノコギリモク、ホンダワラ、ヤツマタモク、ヤナギモク、ヨレモク（図3）のホンダワラ属8種と、一見ホンダワラ属の海藻にそっくりで刺胞動物（腔腸動物）のクロガヤも見られた。クロガヤは群体をなし、触れると痛い。しかし、ウミトラノオや最近DNA解析からホンダワラ属に移されたヒジキ属のヒジキ（Stiger *et al.* 2003）はお祓いには使われていなかった。

お祓いや神事に使った潮草は、例えば正月15日のドンドや神社の焼却炉で燃やす。昔は田舎の十字路に御神木を立て、正月に神様にお供えした注連縄やお札と一緒に潮草を燃やした。決してゴミ箱には捨てない。

4. 神事と潮草

燧神事

佐太神社では、お祓いに潮草を使う風習の起源を示すと思われる神事がある。佐太神社の年間行事中、最古で最重要の御座替神事で、起源は平安期以前と伝わる。神々が鎮座する一豊位の御座を取り替える神事で、古い生命に代わり新しい生命を迎える事をも意味する。旧暦の8月19日から24日、新暦になってからは9月19日から潔斎が始まり、24日夜に御座を取り替えるが、この間のお祓いに潮草を使う。

9月19日夜、宮司は弥生時代の遺跡近くの古浦海岸で禊ぎをした後、潮草と海水を入れた潮汲み桶を持ち帰り、家族と離れて一人社務所にこもり、潔斎を始める。潔斎中の宮司と神様の食事の火を毎朝おこすのが、古代の発火法の燧（図6）である。燧は新年や新生命を迎える重要な神事だが、御座替え神事でも行われる。御祈祷所の入り口には小さな潮草が潮汲み桶の上に置かれ、中に入る時、神職達は潮草で自分自身を左・右・左と扇子で扇ぐように祓い浄め、参列者の私も祓われた。島根県大田市の五十猛神社で正月15日の神木さん（ドンド）で行われるお祓いの方法と同じだが、佐太神社の潮草は15 cm 程度と短く、潮汲み桶も小さい（図7）。

燧に使う燧白は4 cm × 40 cm 程のヒノキの板で、その縁には直径1 cm 弱の穴が空けてある。燧杵用のウツギは直径約1 cm、長さ約30 cm の棒である。同じ燧でも、出雲大社の燧白のヒノキはまな板の様に大きく、燧杵のウツギは約80 cm と長い（小泉 1894）が、ここでは燧白は幅が狭く、燧杵は短い。

火を起こすには、一人の神職が燧杵を燧白に空けた穴に入れ、両手で激しく揉んでこすり合わせ、両手が下の燧白に達すると、次の神職が上から同様に揉み始め、順々に3人が燧杵を揉んで燧白と摩擦させる。10分程して下に溜まった燧杵と燧白から出た黒い粉が熱を帯びる。硫黄を塗った薄い竹べらを差し出し、ポーッとついた火を蠟燭に移し、蠟燭を提灯に移すと、風が吹いても火は消えない。神様と宮司のカマドは別の火で炊くので、小休止の後、再度同じ作業を行い燧を行ったが、今度は調子が悪く40分程かかった。皆、手のひら

に豆が出来、豆がつぶれた人もいる。古代の伝統的神事の継承は、古代の生活を現代に行うことで、案外、楽でない。

御座替え神事と例祭

御座替え神事は、佐太神社の神事の中で最古であり最重要である。9月19日から宮司を含め神職4人がその任に当たるが、24日の夜は7～8人で行う。私が参列した御座替神事は2006年9月24日夜8時からだった。旧暦8月24日は夜半の月の出、闇夜だが、当夜も闇の中、三神殿が厳かに建つ。数十人の見学者が境内の「舞殿」の周囲に集まり、御座替神事と同時進行中の佐太神能（能と神楽を合わせた演劇で国の重要無形文化財）を見学している。神殿の門の入り口には、潮筒と潮草を置き、神職は先ず自らの身体を潮草で祓い浄めて中に入り、本殿を祓い、我々特別参列者も祓いを受けて中に入る。神殿と神殿の間の敷地では高さ1 m 程の鉄製の籠の中で薪を焚き、周囲を明るく暖めている。朝山宮司と数名の神職は、まず南殿の前で祝詞を上げ、御座替えを行う（図8）。宮司を先頭に神職達が階段に上る。神職により階段の高さが数段づつ違う。暗い中、宮司は提灯1つで神殿の奥に入り、前年の古い御座を持ち出す。御座は階段に並ぶ数人の神職を順に経て下に降ろされる。続いて今年刈ったイグサで作られた新しい御座が、今度は逆に階段下の神職から順に数人の神職を経て宮司に渡され、宮司はそれを神々に供える。因みに、御座の原料のイグサは既に1100年以前には栽培され御座が作られたようだ（深根 918）。御座替は、南殿の次は北殿、最後に正殿で行われる。この厳粛な神事では、人も建物も御座も総てを潮草で祓い浄め、午後10時半頃に終わった。その後、宮司さんのお宅で楽しく賑やかな直会が始まり、夜半過ぎまで宴は続いた。

翌25日の例祭は元来、御座替え神事が無事に終わった事を祝う祭で、佐太神能が舞われ、潮草を使わず大麻で祓う。これは、既に平安時代以前、最重要の神事では伝統的な潮草で祓い、他の神事では後で発達した大麻が使われた事を意味する様に思える。朝山宮司も、潮草でお祓いをする起源とその中心の地は出雲の佐太神社だと推測されている。

5. 佐太神社周辺の歴史とお祓いの起源

縄文期以来の豊かで宗教的な地域

縄文前期から古墳期にかけての佐太購武貝塚（1933年国指定史跡）がある（図1）。縄文時代は今より概して温暖で海水面も高く、汽水湖である宍道湖は佐太神社付近まで入り込んでいた。魚介類、特にヤマトシジミ、獣骨、土器、金属器等が出土し、朝鮮半島や日本各地との交易が盛んであった。弥生時代では、佐太神社駐車場付近の佐太前遺跡（現在の鹿島歴史民俗資料館）から弥生式土器、土師器、須恵器、玉未製品などが出土した。日本海沿いの古浦砂丘遺跡からは弥生前期の朝鮮系人骨60体が出土し、うち5体は銅板を頭に巻いて骨が緑色に染まったシャーマンとみられる男性であった。占いに使った鹿のト骨も出土し、彼等は宗教を持っていたら

う（鹿島歴史民俗資料館，丹羽野輝子氏私信）。志谷奥遺跡からは青銅器製の銅剣6振り，銅鐸2個が出土した。古墳時代では，奥才古墳群などがあり，青銅器の武器や勾玉・管玉などが出土している。また，堀部遺跡からは縄文から中世に至る遺物が連続して出土している。このように，佐太神社を中心に半径5 km以内には縄文期以来の100個所を越える遺跡が密集する（鹿島町教育委員会 2001）。奈良時代の古事記や特に出雲國風土記には，出雲人だけでなく，海・山・川，海藻を含む動植物が頻繁に登場し，奈良時代のみならず，それ以前の歴史的背景を感じるが，記述の一部は考古学的証拠からも明らかになりつつある。神社の周辺には縄文期以来，人々の豊かで宗教的な暮らしがあり，連綿と現在に続いている。

食べられる物は清浄で，ケガレを祓えるという概念

ところで，出雲のお祓いにおける潮草には五穀豊穡祈願の意味はないが，ジンバの持つ小さな浮き袋は米粒を付けた稲穂に似るので，稲穂に見立て，五穀豊穡を祈願する。今でも日本では，正月に三宝の上に半紙・ウラジロ・コンブ，ホンダワラ・米の付いた稲穂，大小の鏡餅・茎葉の付いたダイダイなどを積み重ねて床の間に飾り，その年の幸福と一家の繁栄を祈る家がある。佐太神社周辺では，戦後暫く，正月前に行商の魚売りがジンバも一緒に売りに来た。一般家庭では元日から七日まで，天井からヒモを垂らして竹を横にぶら下げ，そこに弥次郎兵衛の様にジンバ・コンブ・鯛・大根・蕪をぶら下げて歳神様にお供えし，五穀豊穡を祈った。しかし朝山宮司家では，折敷と呼ぶ，足のない三宝に，正月前から大根・蕪・コンブ等を載せて供え，ジンバは供えない。出雲人も，中央から来た朝山（大伴）氏も各自の伝統文化を守り，双方が現在に伝わっているようだ。

古来，朝鮮半島や済州島ではホンダワラを含め，非常に多量の海藻を食べる（バード 1897）が，儒教国の朝鮮では海藻を清浄視する考えは発達しなかった。日本では壱岐・対馬や島根県全域，輪島のような日本海側の古い港町でホンダワラなど多種の海藻を食べる。古代日本人は，海藻や魚介類を無尽蔵に生み出す海は清浄で生命力に溢れていると考えた。また，食べられる物は清浄という理念で，ジンバも，昔はジンバを燃やして作った塩も清浄で，これらはケガレ，即ち気の枯れ，気力の枯れ，生命力の衰え（この最たるものが死）を祓い，浄め，再生させる力を持つと信じられた。島根では，島根半島東端の美保神社や隠岐の玉若酢命神社で，祭の前に裸で海に入り禊ぎを行うし，島根県全体にジンバで祓う地域が多い。海と朝鮮との関係が深かった佐太神社周辺も，縄文前期（佐太購武貝塚）や弥生期（古浦砂丘遺跡）には，ホンダワラを含めて海藻を大量に食べていたであろう。しかし

たら既に縄文期か弥生期には潮草でのお祓いが行われていた可能性もある。佐太神社周辺は現在，ホンダワラ類でお祓いを行う中心地であるが，発祥地でもあり，後代，大麻が潮草に代わってお祓いに用いられたのではないだろうか。

6. まとめ

佐太神社を始め島根県の古社では，忌明けの参拝の際，ホンダワラ類でお祓いをする風習がある。平安時代以前に始まり，佐太神社で最古・最重要の御座替神事ではホンダワラ類でお祓いをし，その翌日行われる例祭のお祓いでは大麻を使う。また，佐太神社周辺には縄文前期から中世に続く100を越える遺跡があり，その文化は縄文期から連綿と現代まで続いて来た。これらから，大麻の起源はホンダワラ類と推定され，後代，海から遠くても便利な大麻に代わったのであろう。その起源は現宮司家が出雲にきた平安時代以前で，縄文期にまで遡る可能性がある。

謝辞

本研究では，朝山芳園宮司を始め多くの佐太神社関係者と，鹿島歴史民俗資料館の丹羽野輝子氏の御世話になった。また，ホンダワラ属の海藻の同定をして頂いた京都大学の鯉坂哲朗博士と東邦大学の吉崎 誠博士・国立科学博物館の北山太樹博士，図を描いて頂いた筑波大学自然科学類の安藤鷹乙氏にも御世話になった。これらの方々に心から感謝したい。なお本稿は，濱田（2002，2007）を加筆，改稿したものである。

引用文献

- 秋本吉郎（校注）1958. 出雲國風土記（733），pp. 198–199. 日本古典文学大系 風土記. 岩波書店.
 バード，イザベラ 1897. 朝鮮紀行. p. 60, 163, 165, 222. （時岡敬子訳 1998. 講談社学術文庫）.
 深根輔仁 1918. 本草和名.
 濱田 仁 2002. もっと藻の話 第26話. 実業之富山 2002年6月号.
 濱田 仁 2007. 大連大学 第二回 中・日・韓日本語文化研究国際フォーラム.
 鹿島町教育委員会 2001. 鹿島の遺跡小集. pp. 1–11.
 小泉八雲 1894. 日本瞥見記上，口絵写真. （恒文社，1975）.
 倉野憲司（校注）1958. 古事記（712）. 太安万侶，稗田阿礼. 日本古典文学大系 古事記 祝詞. 岩波書店.
 黒板勝美（編）1974. 延喜式（927）. 新訂増補国史大系. 延喜式，p. 289. 吉川弘文館.
 Stiger, V., Horiguchi, T., Yoshida, T., Coleman, A. W. & Masuda, M. 2003. Phylogenetic relationships within the genus *Sargassum* (Fucales, Phaeophyceae), inferred from ITS-2 nrDNA comparisons of material collected from the Pacific basin, with an emphasis on the taxonomic subdivision of the genus. *Phycol. Res.* 51: 1–10.